～日本小児科学会の「知っておきたいわくちん情報」～

インフルエンザワクチン B-13

どんな病気ですか？

インフルエンザは、インフルエンザウイルスによる急性の呼吸器感染症です。ウイルスには主にA型とB型が知られています。一般的にA型の方がB型よりも症状が強くでます。

感染すると、発熱・頭痛・全身のだるさ・筋肉や関節の痛みなどがみられ、その後、鼻水・咳などの呼吸器症状が現れます。いわゆる普通のかぜと比べて、全身症状が強いことが特徴です。通常は1週間前後で良くなります。抗インフルエンザ薬を服用することで発熱期間を1～1.5日短くすることが報告されています。

例年のインフルエンザの流行は、12月からはじまり、1月末から2月上旬にかけてピークとなることが多いです。

ワクチンをいつ、何回接種しますか？

6か月～13歳未満	13歳以上
毎年シーズンに2回	毎年シーズンに1回または2回
2回	1回

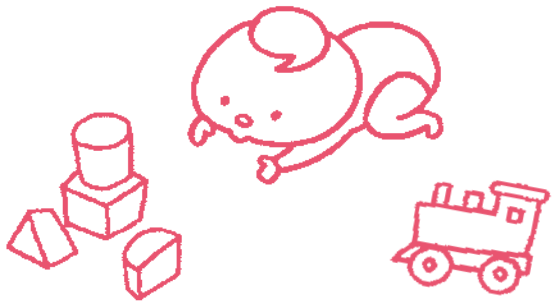
インフルエンザワクチンの予防効果が期待できるのは、接種が終わってから2週後から5か月程度と考えられています。インフルエンザワクチンは、そのシーズンに流行が予測されるウイルスに合わせて作られています。このため、毎年接種を受けましょう。

日本では、例年12月～3月頃に流行し、1月～2月に流行のピークを迎えます。ワクチン接種による効果が出るまでに2週間程度必要なので、毎年流行のはじまる前の10月末や11月からワクチン接種をはじめるのが望ましいです。13歳以上は1回接種ですが、6か月以上13歳未満のお子さんは2回接種します。

ワクチンの効果

インフルエンザワクチンの効果は、色々なことで影響されます。お子さんの年齢、今までにインフルエンザにかかったか、流行しているウイルスの型、ワクチンの型と流行の型が同じかどうかなどです。ワクチンの効果は、B型よりもA型の効果が高いことが知られています。最近の国内の報告では、お子さんにワクチンを接種することでA型の約60%、B型の約40%を予防でき、また、お子さんの入院をA型で約50%、B型で約30%減らすとされています。

インフルエンザウイルスの感染を完全に予防することはできません。インフルエンザの発症を予防したり、発症した後の重症化を予防する効果があります。



ワクチンの副反応

インフルエンザワクチンの接種によってインフルエンザを発症することはありません。比較的多くみられる副反応には、10～20%の方に接種した場所の赤み、はれ、痛みなどが起こります。全身性の反応としては、5～10%の方に発熱・頭痛・寒気・だるさなどがみられます。いずれも、通常は2～3日で軽快します。

まれですが、アナフィラキシー（重いアレルギー反応）がみられることもあります。

その他、重い副反応として、ギランバレー症候群、急性脳症、急性散在性脳脊髄炎、けいれん、肝機能障害、喘息発作、血小板減少性紫斑病などが報告されています。

◆ 咳エチケットしましょう！

どのように感染しますか？

主な感染経路は、咳・くしゃみ・会話などから発生する飛沫による感染です。その他、飛沫の付着物に触れた手や指を介して接触感染もおこります。潜伏期間は1～4日です。

小さなお子さんをインフルエンザウイルスの感染から守るためには、ワクチン接種に加えて、家族や周囲の大人たちが手洗いや咳エチケットを徹底すること、流行時期は人が多く集まる場所に行かないことも重要です。

接触感染
皮膚やおもちゃなどに付いた
病原体に触れて吸い込むことで感染

飛沫感染
咳やくしゃみで飛び散った
病原体を吸い込んで感染

ワクチンが接種できない人は誰ですか？

接種を受けることができない、いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によってアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合

接種を受けるにあたって注意が必要な人

接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後２日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- 間質性肺炎・気管支喘息の呼吸器系の病気がある人
- ワクチンの成分または鶏卵・鶏肉・その他鶏由来のものに対してアレルギー反応を起こすおそれのある人

発　行　日本小児科学会
2018/03作成 ver.1